



# 男は 痛い !

國友万裕

第13回

大阪ハムレット

## 1. クラスに一人いた男の子を忘れないで

ぼくは、その女性カウンセラーにかなり厳しいことを言ってしまった。おそらく彼女の方は今でもトラウマかもしれない。彼女の方は、聞いたこともないような話を突然聞かされて、どう反応していいかわからなくて、困惑していたに過ぎなかった。もし、ぼくが何度か男性学のレクチャーをすれば、彼女だって理解できたに違いない。しかし、クライアントがカウンセラーに、お金を払ってレクチャーをするというもおかしな話だ。

結局、ぼくはジェンダーにとらわれ過ぎてしまっている。彼女はおそらく、ジェンダーの問題について深く考えたこともない人だ。フェミニスト的な女性ではないのである。しかし、その彼女であっても、女性差別や女性被害はある程度はピンと来るのではないか。彼女は、大学で教えた経験も豊富な人だし、この頃は、セクハラ対策委員会はこの大学でもある。先生たちもセクハラの疑いをかけられたのでは困るから、そういう部分には神経質になっている。この頃は男子に対するセクハラも認められるようにはなっているはずなのだが、やはり、初歩的なことしか普通の人は理解していないのだろう。

彼女とのカウンセリングの1回目のとき、ぼくは子供の頃からジェンダーに囚われていて、ほとんど女性とつきあったこともなく、ゲイになるわけでもなく、男か女かわからないような状態でこの年まで生きてきた、いまでも女性恐怖だということは話した。最初の前置きのつもりだった。

そして2回目のカウンセリング。そのとき

の会話は以下のようなものだった。

「ぼくの小学校の高学年の頃の女の先生は、男子にのみ体罰を与える人だったんです。それがぼくのジェンダーへの囚われの原因なんです」

「でも、あなたが殴られたわけじゃないんですでしょ？」

「ぼくが殴られたわけじゃないけど、いつ殴られるかと思って、いつだって恐怖におびえていました」

彼女はまるで理解できない困惑の表情だった。

「先ほども男のかたが来られていたんですけど、その人の話はよくわかるんです。でも、あなたのはわからない」

なぜ、わからないのか？ ぼくには、わからない彼女がわからなかった。彼女は体罰容認派なのだろうか。体罰には目撃体罰という言葉もあるし、自分が殴られたわけではなくても、誰かが殴られているところを目撃するだけでも、子供の心を傷つけるということはどうの昔から言われていることだ。彼女はまだ30代のはず。この世代で体罰肯定派ということはないだろうに。

おそらく、彼女はなぜ、子供の頃に体罰を目撃したくらいのが、50までも続くようなトラウマになるのかがわからないのだろう。彼女は、考え込みながら、「男の人が奥さんを殴るってこともあるから」と自問していた。「だから、男が奥さんを殴るのも問題でしょう。あなたは、DV容認派なのですか？」今考えれば、そう問いかければよかったと思っている。おそらく、彼女は男性問題だけではなく、DVの被害女性のことも大して知らないのだろう。DVの被害を受けた女性のなかには、

男全体に敵意をもっている人だって大勢いる。しかし、DVに対する意識は女性によって大きく異なっていて、DVを目撃すらしたことのない女性は、DVなんて一部の極悪な男のすることだと思っている人もいるし、まるで人ごとのようにしか思っていない人もいる。自分が殴られたわけじゃない、他の女が殴られるのは、他人事なのだ。

ぼくは彼女にもっと丁寧に教えるべきだったのだろう。先生が何もわからない子供に手取り足取り教えるような気持ちで……。ぼくは生まれつきスポーツやけんかができず、男として3流という意識をもっていたということ。その女の先生は、「男の子は一家の大黒柱にならなきゃいけないのよ」が口癖で、男性ジェンダーを男子に強要することを何とも思っていないくて、何かにつけて男の方に厳しかったということ、そのことにぼくは深く傷つき、男性差別という意識を早くももち始めていたということ。

おそらく、女性たちは、スポーツやけんかできないことが男にとっては重大な問題であることに気づいていない。もちろん、何事であっても苦手なのはつらいだろうということはわかっているだろうが、スポーツ問題は男性に特有の問題である。女がスポーツが苦手なのと男がスポーツが苦手なのは重みが違ってくる。スポーツができるということは、男らしさの条件だけれど、女らしさの条件ではない。またスポーツのできない男子は、男性的な活動をすることができない。当然のことながら、友達をつくるのにも難儀する。しかし、女はそこまで考えていないのだ。女の子でも、スポーツができない子はつらい面もあるが、男ほどではないはずなのである。

僕らの若い頃、河合奈保子がアイドルだった。彼女は、子供の頃からスポーツがからっきしできなかったことを、明星などのアイドル雑誌で常に語っていた。しかし、彼女は当時、男の子に大人気のアイドルだったのである。一方で女の子に人気のアイドル、例えばジャニーズ系の男性アイドルなどは、バク転ができるところを披露したり、スター水泳大会で活躍したり、スポーツ好きであることを常にアピールしていた。スポーツのできない男性スターがアイドルになるなんてことは、ぼくの知る限りないのだ。

誰しも小学校や中学校の頃を振り返ってみれば、虐められっ子で、女の子たちからもバカにされるような男の子がクラスに一人くらいはいたはずだ。ぼくはまさしく、そういうタイプだったのだが、大人になると、みんな、そういう男子がいたことを忘れてしまうのである。

忘れないで。そういう男子は、おじさんになってからも、心にトラウマを抱えているということ。

## 2. 殴られておけば……。

ぼくが不登校になった原因は、これまでこの連載にも書いてきた。一番の不幸な出会いは、やはり小学校のときの女の先生である。この先生との出会いがなければ、ぼくは人生の迷路に入ることはなかっただろう。

この先生の担任は3年間。この3年間で、ぼくをのぞく男子は一人残らずこの先生からビンタをもらった。女子はひとりももらわなかった。「ぼく、ビンタされる人、私、ビンタされない人」という状態だった。

男の子の方が悪いことをしていたかというと必ずしもそうとは言えない。むしろぼくのクラスは男子はおとなしい子が多く、女子の方が先生への反抗は激しかった。とりわけ、5年生くらいから態度が豹変した女の子がいた。彼女はおそらく反抗期が始まるのが普通よりも早かったのだろう。非行に走るわけではないが、とにかく感情的に先生に反抗し、先生を敵意むき出しに睨みつけることもあった。それでも、先生は彼女を殴ろうとしなかった。男子だったら、口答えしただけでも殴るくせに。

先生と生徒の性が逆だったら考えがたい自体である。男の先生が女の子の顔を殴ったりしたら、男子を殴る場合よりも大きな問題になる。中学の2年のときだったと思う。皆からバカにされていた国語の先生に、授業中、女の子の一人が口答えした。気の強いタイプの子だったので、強い口調になっていた。その時、先生は彼女を前に出すと、頬をピシャリと叩いた。彼女は授業が終わると、机にうつ伏し泣き出した。彼女の仲間の女の子が先生に近づいて行って、「なんで、こんなことをするんですか」と先生の手を引っ掴み、あわや校内暴力にもなりそうな状況となった。女の子たちは皆、殴られた彼女をかばって、国語の先生に敵対した。女子たちの反撃は、まだそれだけでは終わらない。先生の手をひつつかんだ女子は学年主任の先生に、その件を告げ口に言った。

国語の先生が処分されることはなかったのだが、男子だったら考えられないことだった。男子が先生にビンタされたくらいのことで、先生の手をつかんで暴れたりしたら、それこそ停学ものである。あるいはコテンコテンに

殴り返されていただろう。しかし、女子の場合は、停学どころか、彼女たちの方が他の先生にその先生へのクレームをつけるということまでが許されてしまう。

小学校の時の女の先生は、男子は殴っているんだと考えていた。女性は、男は傷つかないと思っているのだろうか？女の方が傷つきやすいと思っているのだろうか？ だったら、なぜ、男の方が自殺が多いの？ ノイローゼが多いの？ 過労死が多いの？ 男は傷ついていないわけじゃない。男は傷ついてもそれを訴えることができないのだ。

いつしか、ぼくは女性全体を色眼鏡で見るようにもなった。女性は、彼女自身は気づいていなくても、どこかで男を差別している。もちろん、男も無意識に女性を差別しているのだけれど、女性差別は問題になる。しかし、男性差別は問題にはならないし、摘発することもできないのだ。

ぼくは、小学校の頃、ビンタされるのが怖くて、相当気を張りつめていた。ちょっとでも隙を見せると殴られる。常にいい子を演じていなくてはならない。苦しかった。自由が欲しかった。その先生の支配から逃れたかった。女の子がうらやましかった。それがぼくのジェンダーへの囚われの導火線であり、不登校への導火線であり、強迫症への導火線でもある。

その女の先生に悪意はなかったにしても、その先生の行為は性差別であり、セクハラである。ビンタには性的な興奮がある。女の先生が男の子の顔を殴るなんて、暴力であるのと同時に性的虐待なのである。

その話を母にしたときだ。「いっそ、一回、殴られておけばよかったのよ」と言われたも

のだ。一回免疫ができてしまうと開き直ってくる。最初は、こんなのは絶対に嫌だと拒否していても、いったん免疫ができれば、平気になっていたのかもしれないのだ。しかし、それはその女の先生の考えを受け入れるということ、男性差別を受け入れることを意味していた。それは、ぼくにはできないことだったのである。

### 3. ぼくの人生の十字架

ある日、親しい仲間たちと歓談している最中だった。ある男性から、「國友さん、出身高校どこの？」と訊かれた。その男性は、九州の出身の人なので、熊本の高校のこともある程度はご存知である。とりわけ熊本の場合は、高校の学閥があったりするので、ちょっと興味をもたれたのだろう。ぼくは、とっさに、「高校の頃は熊本にいなかったんです」と嘘をついてしまった。

この男性に限らず、九州出身の人からは時々、高校のことを尋ねられる。そのたびにぼくは、適当に話をそらしたり、曖昧に返事をしたりで、応えることができない。そして、この時は咄嗟に嘘をついてしまった。

その後、しばらく、ぼくは嘘をついた自分に恥じてしまい、行きつけの自然食レストランで、店の女性たちにそのことを話した。「そんなのは嘘とは言わないのよ。便宜上言っただけのことなわけだから」と彼女たちは言ってくれた。そのレストランは、社会運動系のレストランで、社会的マイノリティや性的マイノリティの人も出入りしている。彼女たちは、マイノリティの人をたくさん見ているので、不登校で高校に行けず、大検で大学に行

った人は他にも知っている。したがって、多くの少年時代に偏見はもっていない。

もっとも、その時、ぼくに出身高校を尋ねた男性も、ぼくが不登校だったことがわかって、そのことに偏見を持つような人じゃない。人間味のあるいい人だし、人間なんて絵に描いたようなものじゃない、人それぞれ事情があるんだということは十分わかってくれる人だ。そのことがわかっていても、他の人たちも交えた軽い会話で、「実は俺、不登校だったんです。だから高校にまともに行っていないんです」とは言えない。せっかくの楽しい会話が他の方向に流れてしまう。嘘をつくしかない。履歴書に嘘を書いたわけじゃないから詐称にはならないし、これくらいの嘘は誰だっけについている。

しかし、できる限り、嘘をつきたくないと思って生きているぼくは、こういう時に、つくづく自分の運命を悲しく思ってしまう。なぜ、俺は高校に行けなかったのか。高校に行かなかったことは、俺の人生の十字架なのだ。

あの先生との出会いがなかったら、こんなことには……。

#### 4. 終わらないトラウマ

ぼくはずっと自分のことを同性愛者だと思っていた。今でもぼくは女性といるよりも男性といる方が楽しいし、男性の方を信頼してしまう。若い頃は、そのことで悩んだものだ。あの当時はまだ同性愛者に対する偏見は根強かったし、結婚して、子供をつくらなければ、男として一人前とは見なしてもらえないというイメージがあった。

今となっては、生涯独身率があがっている

し、同性愛に対する偏見も減ってきた。したがって、ゲイの世界に入ってもいいのだけど、ぼくはそこまでしたいとは思っていない。ぼくは様々なカウンセリングを受けて、自分がなぜ、男性の方が好きなのか、女性とつきあえないのかということを知っている。そして、男性と性的関係をもつということまではしようと思わないということも自覚している。これはゲイと思われたくないから言っているのではなく、実際そうなのだ。

ぼくが男性に同性愛的感情を抱くのは、少年の頃に他の男の子たちと十分に遊んでいないからである。ぼくは50歳になって、いまだに女性に恋する前の小学生の心理にとどまっている。もっとも、一般に男は、大人になっても、男の友情が好きだ。女性は恋愛映画や恋愛小説を好むが、男性は友情のドラマの方を好む。野球やサッカーを観戦するのが好きな男性が多いのも、男同士の友情を見るのが楽しいからである。

しかし、ぼくは女性への警戒心が抜けないがために、欲望が完全に男性との友情のほうに向いていて、女性との恋愛には向かわないのである。普段、親しく話をする女性はたくさんいるが、それはぼくのことを男として見ていない女性たちである。ぼくを男として見て、接近してくる女性とは、ぼくはつきあえない。

これは異常な心理なのだろうか。そんなことはないだろう。女は魔性の存在。古くから男が女を憎しんできたことは、かのポーヴォワールも『第二の性』のなかで語っていることだ。それに昔の人は、親が決めた相手と結婚したりしていたわけで、そうそう恋愛もしていなかっただろう。ところが、自由恋愛の

時代になってからは、恋愛至上主義的な考えが膨れ上がってしまったため、女に関心をもたない男性は異常視されるのである。しかし、恋愛は女の世界。女にある程度は身を委ねるといふ気持ちにならなければ、恋愛はできない。だけど、ぼくは、女性から受けたトラウマの PTSD がぬけないがために、女性に対してバリアをはってしまっている。

おそらく、ハリウッドのロマンティックコメディを見まくって、アダルトビデオを見まくって、強引に女性と恋愛するんだ！と自分にプレッシャーをかければ、ぼくだって女性とつきあえるのかもしれない。しかし、ぼくはそれをするに躊躇してしまっている。それをしてしまったら、ぼくはぼくを苦しめたジェンダーを許すことになる。俺はジェンダーを許したくない。許してしまうと今までの俺の人生が何のための人生だったのかわからなくなる。俺はもの心つく頃から、ジェンダーに苦しんできた。ジェンダーと戦ってきた。その自分に折り合いをつけることのできない俺は、女性とは軽い関係しか築けないのである。

あの先生に出会わなきゃこんなことには…

## 5. かけ違えたボタン

ワイシャツのボタンの第一ボタンをかけ違えると、その後のボタンもかけ違えてしまう。ぼくの人生はまさしくそういう人生だった。ぼくが挫折したのは少年時代だが、少年の頃にボタンをかけ違えているため、いつまでたってもぼくはワイシャツをちゃんと着ることができないのだ。男という名のワイシャツを。

こんなぼくを理解してくれる人は少ない。「ジェンダーって、わからない人は全然わからないのよねー」と、レストランの女性は言ってくれた。ジェンダーくらい、人によって意識が違っているカテゴリーはないのだ。最初から理解してもらえる人なんていないんだと割り切っていくていくしかない。とりあえず、ジェンダーの話はあまり大っぴらにはしないほうがいい、とんちんかんな答えを返してこられるか、意見が対立するかが関の山なのである。

戦死、過労死、自殺、すべて男性がマジョリティーなわけで、男性差別の結果なのだけど、とりあえず、日本は兵役（これは究極の男性差別）もない、ぼくは過労死になるほど働いてもいない、自殺する気もない。比較的平穏に生きているので、他の男の人たちのことを考えて、胸を痛ませることもないかもしれないのだ。

とりあえず、ジェンダーについて考える時間と考えない時間を分けたいと考えている。それが、ぼくが自分を治癒する第一歩である。

スティーブン・キング原作の『黙秘』（テイラー・ハックフォード監督・1995）という映画がある。この映画で、ジュニア・ジェイソン・リーが演じる女性は、子供の頃に性的虐待を受けて、それが原因で男とはゆきずりの関係しかもてないという設定になっていた。この映画と限らず、女性が男性から受けた虐待がきっかけで、男と関係を持てなくなる話はしばしば耳にする。しかし、逆の場合は、まだ認知されていない。俺は40年も苦しんだのに、誰にも認知してもらえないなんて、悲しい話だ。

誰か俺をわかってくれ！！！！というか

すかな願いをこめて、これからもこの連載だけは続けて行こうと思う。

ボタンをかけ違えたままの古いワイシャツは、脱ぎ捨てて、早くに新たなワイシャツに着替えたい。着替えるのが難儀なんだけど、いつか新しいシャツに着替えられる日が来ることを信じて、日々を生きて行くしか、俺にはないのだ。

## 6. 『大阪ハムレット』

前号にも書いたとおり、この連載、この頃たるんできていますので、今号からリニューアルを考えたのだが、あいにく忙しくて、今号もいつもと似たり寄ったりの内容になってしまった。申し訳ない限りである。

最後に映画の紹介をしておきたい。『大阪ハムレット』（光石富士朗監督・2009）である。この映画では3人兄弟がそれぞれ兄弟とは思えないほどに性格が違っていて、三男が女の子みたいな男の子という設定である。忙しくて、今回はDVDを見直すゆとりもなかったのだが、とにかく男の子は多様だということを知ってもらうにはいい映画だったと記憶している。松坂慶子が母親役を好演している。これを見て、痛々しい男の子たちを思い出してください。

次号は正月明けになるので、リニューアルを目指します！！

